
日常から始まった私の冒険日記

亀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日常から始まった私の冒険日記

【Nコード】

N4645M

【作者名】

亀

【あらすじ】

超×10がつく飛びぬけた美貌と頭脳、身体能力を兼ね備えた貴族のシェイデットがひょんなことから護衛のシークフリードと、妖精で友達のサンシャインと、ともに冒険に出る羽目になった愛と冒険の物語

私の日常

「シェイデット様ー！シェイデット様ー！」

あつ・・・アノ人の声だ。

私はシェイデット・シルク・エルシードで貴族の中の貴族。

だから・・・当然疲れるわけで今、しばし休憩中なんだけど

私の好きなシークフリード・エルセウスが呼んでいるのでいかなきゃ
その前にシークフリードは私の幼馴染にして、護衛なわけで、とて
も好きになつていい相手じゃない

でもな、スキなんだよな・・・

つてこんなこと思ってる場合じゃない！

さつさといかなきゃ！

「はいはい、いきますよ。待ってて」

「分かりました。」

本当は呼びにきてくれてうれしいんだけどそんなこと声に出したら、
私の気持ち、ばれちゃう！

とか思いつつ走ったらこけるので、っていちいち説明が遅れてるけ
ど今、着ているのは動きづらい

真つ赤なドレスで、もうのろけ状態になつてるけどシークフリード
は、この国一かつこいの！

だからもてるのも当然なわけでいろいろと心配されるのよね
ゆっくり歩いていると

コッ コッ コッ

と何者かが歩いてくる音がする。バツと勢い良く振り向くとそこには

「こんにちは、お姫様」

うつー！一番いやなやつ・・・サバンナ・マウフ・マウンテンダウ
ンがいた

金髪で赤い眼の私の家と並ぶ貴族だ。

少しかっこいいがシックフリードほどではないし何かと癪に障るの
でスルーして進む

けどー！！

何でついてくるのよー！！

とうとういやになり思いつき声に出して

「ついてくんなーっ。」

いつてやった。もちろんサバンナは啞然としている

く十分後く

やっとなつたー！

私の屋敷。

おそい！見たいな眼で見てくるシックフリード

「ごめんなさい。」

素直にあやまった。だって私が遅いのが悪かったんだもん

「別に怒ってませんよ。とにかくあたしはもう暗いので中に入っ
てください。」

言われるままにする。

中に入ったらまず飛んでするのがこの一言。

「何してたの？シェイデット？」

私の妖精のサンシャイン・シルク

白い天使のような翼が生えててきれいな金髪の緑の眼をした女の子w
私の自慢者w

で、スルーするのはいやなので今日あったことをこと細やかに話した
そのあと食事

その後シャワー

その後睡眠

サンシャインは私の作ったぴったりのサイズのベットで寝ていて
シックフリードは私の部屋に角で愛刀の風影「両手剣」を抱いて座
って寝ている

私も一緒に寝たいなーとか思いつつも私も自分のベットでいつもの
ように睡眠をとる

いつもならそこで終わりだけど

深い居眠りに陥る直線！

ガサツ・・・ガサガサガサツ

物音が聞こえた

私の日常（後書き）

初心者です

名前を亀と申します

毎週金曜日に更新しますんでよろしければ読んでくださいな

奇襲

私は何時もの様に近くにおいてある両手剣の「華影」を取った
あたりは夜なので当然の様に暗い。暗闇には、なれているものさ
すがにちよつと見にくいな

でも、まあシックフリードがいることだし、大丈夫かな？

サンシャインが耳元で

「敵の数およそ20人」

とささやいた。え、以外に多いよ・・・

てことは、魔法全般つかえてしかも一般人で1撃で死ぬサンシャイ
ンに10体倒してもらうとして後は、

私が倒すかと、

そうと決まれば倒すのみ！！

「サンシャイン10対倒して！！私は残りをつぶすつ！！。」

サンシャインが呪文の詠唱にかかる

「我が名はサンシャイン火よ我に従え！！。」

いったとたんにもう10人火達磨ですく！

私も早くたおさなきゃな

だからもう波動でかたづけちゃおう

「はアアアアツ！！波動の舞！！。」

よっしや一撃！

10人倒しだぞ〜

ってあれ、あれれ？

シークフリードがいない！！

どうしよう；

ってサンシャインもないし！！

あ、紙がある

「お前の護衛と妖精は預かった。返してほしくばサバンナ様の別荘にこい！」

てことは、あのうざいサバンナのところに行かなきゃなんないの〜！！

行きたくない…………

でも行かなきゃ！！

ここから割りと近いし、てか隣だし。

もつと普通は遠くにしませんか！？

とか思ってるひまもないよね。

さて着替えるか。寝巻きのまんまじゃ動きにくいっいたらありやしない
なので私のマイ冒険服

一見ジミーな半そでと半ズボンなんだけど、光のコーティングがし

てあって、しかも防水なのw

だから冒険服に適してるわけ

さ、靴を履いてレッツゴー！！

もちろん窓からだよw

2階の……

あっちの屋根に飛び移ってっとおっとと

落ちそうになっちゃった

もちろん気にしてる暇なんてない！！

でも胸邪魔だな

「サバンナ！いい加減この縄を解け！！風影を返せ！！どうせお前

らはシェイデット様がきたら俺みたいに縄で縛るつもりだろ！」

「なんだとお！」

言い争い？でも短剣持っていてよかった。

よしじゃ剣構えて窓から・・・

突撃~~~~~！！

「来たわよ。」

「つ、捕まえる。」

サバンナ、甘いわね。私がそんなに簡単につかまるとでも！！

「う、うわわわわああああああああ。」

どんどん切り倒されていくとうとう全員たおされた

「大丈夫？シークフリード、サンシャイン！。今すぐ縄ほどいてあげるからね。」

誰もが一瞬でとろけるようなすんごいはじけるような笑顔で言った

「だ、大丈夫です。」

「大丈夫です。シェイデット様。」

よ、良かったw

さてと、帰りますか

「さてと帰りますか」

これで何時もの夜が帰って来るはずだったが・・・

「なにこれ~~~~~~~~!!!。」

屋敷がめちゃくちゃに潰されていたのだった

奇襲（後書き）

さてどうなっちゃったのかな？

「何でつぶすの〜！私の屋敷!!。」

「（亀）その方が手っ取り早く進むから〜。」

「「「ええええええええええ」」」」

「w」

てなわけですきもおたのしみに〜

ちなみにたまに土、日、火にも更新しますんでw

冒険の始まり

「お父様〜！！お母様〜！！生きてたら返事して！！！」

必死に両親を探す。

もし死んでたらどうしよう・・・怪我してたらどうしよう
そんな気持ちでいっぱい、どんどん涙があふれてくる。
どうしようどうしよう

そんな時誰かが私の背中をギュッと抱きしめてくれた
シークフリードだった

「大丈夫。きっと大丈夫だよ。だから安心してやるべきことを考えて。」

「うん。」

そうだった。すっかり動揺して肝心なことを忘れてた。

「ありがとう。」

本日二回目のはじける笑顔で返した。

まず、瓦礫とかどかさなきや。

「シークフリード、サンシャイン瓦礫をかたずけて！！私はお父様とお母様を探す！！。」

「はい。」

二人はてきばきと作業に取り掛かった。

私はお父様とお母様を想像して私の式神サンとシエルにそれぞれ探すように命じ

私も出来る限り探した

お願いします。おとうさま、おかあさま生きてて・・・

それだけを祈りながら

～一時間後～

「主様、見つけました。」

「どこ？どこなの!!」

「それが・・・」

よかったというよりもサン達の一言で不安に変わった。
ねえどうなの？どうなの？

「それがなに?。」

わたしは内心震えそうな感情を押し殺し平然を装っていった。
聞くのが怖かったけど。

「息を・・・引き取られました・・・。」

「!!!!!!!!!!!!!!。」

ああ、もうだめだ。

「伝言があります。」

「何？」

鳴きそうな声で言ってしまった。
サンたちが

「どうか生きてくれ、生き延びてくれ、この町はもう危ないどこか森でもいいどこか遠く……です」

「分かったわ、もう戻ってよろしい。ご苦労であった。」

「はっ」

サン達が戻ったあと、私はシークフリード達の方に向かった。
シークフリードたちはもう終わったらしくなぜか座っていた。仲よ
さそうにしゃべりながら……
はじめはなんかいやだったが、今はそれどころではない。

「どうしましたか？見つかりましたか？」

シークフリードが気がついてらしく声をかけてくれた。そのあと不
機嫌そうにサンシャインも

「もう見つかったんだア。」

といった。悲しいけど悲惨な事実を受け入れて話した。

「息……を……引取り……ました。」

途中で涙でとぎれとぎれになっちゃったけどいえた。でもそれが思った以上につらくて、もう涙が押さえきれない。

「「え」「

一足遅く理解した二人。その後私が

「うえええええええええええええええええええええええん。な
んでしんじやったのよおおおおおお。とっぜんすぎるよおお
おお。」

と、思いっきりないてしまった。それをやさしく抱きしめてくれた。
シークフリードど、サンシャインがいた。

「大丈夫、俺達がついているじゃないか。だからもうなかないでシ
エイデット。」

「そうですよ。もうなかないください。こっちまでないちゃうじ
やないですか。うええええええええええええええええええええええ
ええええん。」

「そうだね。泣いちゃいられないんだった。」

「「え」「

いつの間にかとまっていた。涙。事实は跡で受け入れなきゃいけな
いんだった。とにかく食料、武器ともって森にいかなきゃ！

「どつゆつどつ。」

いまいち理解できてない二人なので1から十までおしえなきゃ

「あのね、お父様とお母様が最後に森に行きなさいっていったの。だから、食料、武器、テントなどを持って森に行くってこと。」

「ええええええええ」

「うん」

「「まじですか」」

「まじです」

「「わかりました」」

承諾早っ！

ま、そのほうが良いけどね。

「「来ました」」

「早っ！！」

ええ。早いな。まあ私は終わってるから

「「「いざ、森へ！！」」」

冒険の始まり（後書き）

「「「なんか唐突過ぎない？（ませんか？）」「」」

（亀）「まあ良いじゃないの。そのほうが楽しー！」

「「「楽しくない度思います。」」」

（亀）「w」

そんなこんなで第三話です。

第四話も読んでね w

森に行く前のちょっとした雑談

「で、どこいくの?。」

「とりあえず。魔の森に行こうと思うんだけど。」

私が修行したとこだし、しかも、全員私の僕だし（まあ、さすがに主とその使い魔っぽいのはむりだったけどね）

だが、それを知っているのは、シェイデットだけだった。ので、当然危険度の超危険なとこにいくとなれば当然

「無理です!!」

という反応が返ってきた。でも、シェイデットにはなぜ無理なのか分からなかった。ので・・・

「何で無理なの。」

「馬鹿じゃないですか?」

くくくくく。馬鹿にされた。てことは、知らないんだ。不思議と顔が緩んでフツと笑ってしまった。二人は、不思議そうな顔をして

「何で笑ってるんですか」

と聞いてきた。その顔が余計におかしくて

「あはははは。」

と、笑ってしまった。二誌の顔が余計に険しくなっ

「なぜわらってるんですか！！！」

と言った。あ、そうだった。説明しなきゃ

「えとね、まず笑ってたのは、二人の顔がおかしかったから。」

「なんですとー！！」

「あははは。」

「もう（つつく）」

「でね、魔の森のことなんだけどね、あそこ私にとっては一番安全なところよ。」

「なぜ？」

「だって、主とその使い魔らしき物意外は全員僕だから。」

「ええええええええええ」

「w」

「じゃあ、早速いきましょー。」

相変わらず、反応早いな、そのほうがまあ楽つていえば楽なんだけどな、なんだかな

「早く来てください。」

ええ、もうあんなとこにいるし何でそんなに早いのかな、行動といい、理解力といい。

でもシェイデットはそれを上回る理解力と行動力を持っていることを、まだ理解していなかった。

森に行く前のちよこつと雑談（後書き）

「（シェイデット）なんかいろいろさつさと進んでいくな。」
「（亀）めんどいもん。細かく描写するの。それに、苦手だし。」
「（シェイデット）読者の方々に理解してもらいにくいですよ。」
「（亀）うっ！。」
「（シェイデット）ったく〜！。」

なんとなくで第四話です。

第五話も読んで下さいね〜b

誰もいない森（前書き）

長い間放置してスイマセンでした！
夏休みはいましたんでがんばって更新します！

何処なの？どこにいるの————。」「

どこ？どこ？どこなの？

モロ、サン——！

ふと、サンの言葉を思い出した。

（私達を呼びたいときは、思いっきりモロみたいに遠吠えして——！
そしたらすぐに遠吠えで返すから）

そだ！遠吠えだ。そうと決まれば

ウオオオオオオオオオオオ——————————ン

ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン

いる！いるよ——！サンとモロがいる——！

それを見ていたシークフリードとサンシャインは

（（なにしてるの（んだ？）（））

と、啞然としていた

が、もうそんな状態ではなかった！

なんとシェイデットが目の前から姿を消してしまったからだ。

「「.....」」

「え、シェイデット?。」

「シェイデット――!」

そのころシェイデットは・・・

誰もいない森（後書き）

「（シエ）今度はどこにさらわれるの？」

「（亀）さあね。」

「（シェイデット様に早く会いたい・・・。」

そんなこんなで第五話です

よかったら感想書いてください

うまくまとまっていなかったらごめんなさい>< ;

実は

攫われたと思われているシェイデットさん

でも実は攫われてなどいなかった。

サンとモロを見つけたので秒速5000mという超高速で走っていたのであった。

当然1秒もかからずについていた

「サンーーーーー」

モローーーーー

会いたかったよお。」

「あら、早いわね」

「相変わらず早いな」

「「うあつ」「」

ドーーーーーん

突進したがために三人は一緒になって、ねっころがった

「心配したんだからもーーーーっ!」。」「

「「なんか知らんけどごめんごめん。」「」

「でも見つかってよかった。」

「それはこっちのせりふだ。」

「なんで?。」

「こっちの方が心配してたのに」

「お前知らないのか!?」

「えっ、何?何!?」

「何が起こったのかな?」

「ここ、今クリスっていう超強い女に荒らされてるの!」

「サン顔怖いよ」でも、サンより強いって私勝てないじゃん!!

勝てます

どうしょ

「あれ?サンシャインとシークフリードは?」

「あ、おいてきちゃった。」

あゝあ面倒だけど戻るか

「戻ってつれてくる。」

走ろうとしたとき

「まって!!」

ん？

「私も行く！一人じゃ危ないから（だぶんだけど）」

「わかったwんじゃ一緒に行こう！」

ザン

と、一瞬にして二人の姿が消えた

実は（後書き）

さてさて次はどうなるのかな？

まあがんばってやつと第六話

次もお楽しみにしてください

コメントもまっています

最強すぎるだろ・・・（前書き）

少なくてスイマセン

最強すぎるだろ……

一方好きな人^{シェイデット}がいなくなつて大慌てのシークフリードさんはいいますと

「どこだー……シェイデットー……」

と、闇雲に探していました。

サンが言つてた通りに

巨大な化け猫が出て参りました。

ちなみに危険度は $\times 8$ というものすごく強いのです。

このクラスとなるとさすがのサンシャインもかすり傷一つ負わせることは出来ません。

そこに、さあ大好きな人^{シェイデット}がやってきました。

誰かと一緒に

（誰だこの人）

とか思いつつも

多分仲間なんだろう。

と、勝手に解釈しているうちに

ミギヤアアアアア

という猫さんの断末魔が聞こえました。

「「え。」」

いや、いやいややばいってお二人さんよ何であの精霊界での最強
さえ倒せなかったやつ倒してんの？

ありえんだろう

あんなに強かったわけ？

アイツの昔って

最強すぎるだろ・・・（後書き）

めっちゃ少ないけど

我慢してください

えっと、第七話です

第八は比較的早く投稿しますんでよろしく

チートすぎる話（前書き）

もつめちゃくちゃになってますが

見てください

チートすぎる話

そう、アイツの昔は……

ってあれ？思い出せねえ！！

なんでだ？なんでなんだよー

くそっ！こんな自分が恥ずかしい

ごめん、シェイデット

「ねえねえ、そのこ誰？」

アイツ妖精。えっとー名前はたしかサンシャインだったっけ

「サン。」

えええええええええ、あの、ええええええええええええ

サンっていえば、あの神殺しのサンですか？？？？

「サンってあのか、神殺しの？。」

「うん。」

えええええええええええまじっすか。

おいおい、てか何で一緒にインの？

わけ分からん

とか思っていたら、声に出していたらしく

シェイデットが答えてくれていた。

「えつとね、私がまだ4、5歳のころにこの森に探検に「はあ〜！？」

ないだろおかしいだろ

「探検に行ったらね、この森の魔獣たちに出会ってね、それではし、ばしと倒しまくってたら」

何で倒せるのぉかしいでしょう？頭どうかしてるんじゃないだろうか・・

「いつのまにか、刃向かう奴等がいなくなって、それでサンと仲良くなって現在に至るわけ」

「そうよね、最初は弱いと思ってたらいつの間にか倒されたりとかして」

「ええええええええ！！！！！？？」

頭どうかしましたか？

「んじゃ、今倒せる?」

「わかんない」

どこからとも鳴く声がして

「やめておけ」

すごい低い声なんですけど・・・

って、で、出出でつかい狼!?てかこれってまさか・・・

「」「」「モロ?」「」「」

おおゝ見事にはもって、ってそれどころじゃない

まじっすか、アアもう神経がつか頭がもうだめだ

サンシャインとシークフリードが同時に

パタリ

「ええええええええ」

「なんで?」

「どうした?」

頭と体が分かる極限まで達していたのもう許容範囲を越したのも

あり

現在に至るのであった

チートすぎる話（後書き）

ああああああ

こんなだめ作文なんてだめだ〜

とか思っけていてもやっぱり

消せない亀でした

とまあ、かけたのでま、いつか

次回もお楽しみに〜

気絶しすぎ（前書き）

す、すすすすスイマセンでした

本当にゴメンナサイ

でも今度こそさくさく投稿するつもりですので

気絶しすぎ

気を失ってしまっている・・・

私ってそんなに変かな？

嫌われたらどうしよう・・・

どおっしよう

影でちょっぴり泣いてしまった

私って弱いな

よし、特訓特訓（剣の）

「ハッ、、、てい、、、。」

さっきからひたすら広いところで素振り

「9876、9878、・・・・987654321・・・・
1000000000」

はあ、はあ、はあ、疲れた

いつこうに目を覚まさないなこいつら、いい加減こめかみがぴくつ
いてきたけど・・・って、

やばいやばい辛抱辛抱・・・

く3時間経過く

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

いい加減覚ましてもう限界何すけど・・・

く5時間経過く

耐えろ耐えろ私このどうしようもない怒りを

よし素振りで精神統一

く1日たちましたく

さすがに途中仮眠を取りましたよ？

でも気絶でこれほど目覚めんやつ初めて見たよ

怒りを通り越して尊敬するよ

私じゃそんなに気絶してられない

ま、気長に待つさ

それを見ていたサンたち

「よく待つてられルよな」

「そうよね」

「俺ならたたき起こしてるけどな」

「あの「銀の魔女」がねえ」

「そうだな、銀色の髪、つややかな唇、でるところはでてでないと
ころはでないとところがまた」

「もろ!!」

「悪い悪い」

「でも、たいていの男はほっとかないよな」

「同感。」

「お前もな」

「!!!!!!」

「笑」

「ばか」

くシェイデットく

コツコツコツ

私は今一応土に木をさして丸太を紐で木くくりつけて丸太を揺らし
て避けながら木の上を跳ぶという作業を繰り返しています。

ちなみにこれもつかれこれ三時間ほどやってるんだけど・・・

あははは

もうこいつ等たたき起こしていいかな??

ふふふ

いやゝさすがに、ね

私も限界があるってゆうか

うん

つたたき起こそう

気絶しすぎ（後書き）

「何で投稿しなかったの？」

「出来なかったんです」

「なぜ？」

「なぜかログインできなかったんです。はい」

「どんまい」

さて次ぎはシェイデットが・・・をします

お楽しみに〜

過去（前書き）

みじかいよ

過去

つと・・・

最初は思ってたけど。

やっぱ無理！

なので久しぶりに昔の思いにふけてますか

それは15年前くらいかな

私はまだ日本人で格闘系はすべて何段かとして

学力は学校内でトップクラス

というまあ、超人？見たいな感じですね

で、なぜか男と女にまあ好意をもっていたいただいて

楽しい毎日でしたよ・・・

あの事件しかなければ

私は何時もの様に学校を終え帰ってました

そしたら軽トラがこっち向かって来て

ドカーーーン

ですよ。

でも持ち前の運動神経で何とか避けましたよ？

でもな

何処からともなく槍がざつと三万本ぐらい振ってきて串刺し状態で意識とびました。

そのとき思いましたね銃刀法違反でないかな？つと

それともう一つ

神様なんのためにいんの？

意味なくね？

つと、だからつてわけでもないけど神様が謝りに来て……つて来なかったら絶対呪い殺してたよね

で神さんが言っただのです。

「何でも願い3つ叶えてあげるから異世界だけでもう一回蘇らせてあげるから」

と、言ってきたのです。

願いなんてあるはずなく・・・

あ、でも異世界行ってみたくいと、思いましてね

「いいですよ。」

言ってしまったね

「んじゃ願いをどうぞ。」

「その一、能力今の私の500倍ね

その二、私は神の能力が使えます

その三、私は魔法が使えます

ちなみに魔法は妖精さんだけ使えるようにしてね」

「まあ了解です。

神の能力は妖精も使えない「回復」が使えることです。」

(シヨボツ)

「まあ行きますね。えいつ」

はい、転送です。

転送先は、赤ちゃんでした。

貴族のわ子です。

なんかうれしいような・・・

「まあ、なんてきれいな子でしょう!」

「そうだな、私達にそっくりだ」

バカップル？親ばか？

「名前は・・・シェイデット！シェイデット・シルク・エルシードだ」

なにそれ

なぜ名前が影の意味のシェイデット？

意味不！

過去（後書き）

過去編ね

一旦きります

次も過去編

護衛との出会い（前書き）

これで過去編オーバー

護衛との出会い

まあ、名前はしょうがないとして

赤ちゃんってどんな泣き方すればいいの？

（てきとうにやっつけ）

うっさい！いまさらなんで、でてくるのよ

てかこれってテレパシー？

（ピンポン大正解）

ほんと殺していい？

（ちよっ、それマジで勘弁な）

でも、私の本気的能力地ってどれ位なんだろうか・・・

（神を素手で殺せる）

おおすげえ

（めんどいから赤ちゃん期飛ばしますby作者）

当然ながら言葉は3ヶ月で覚え二足であるけ

なんでもできるスーパー赤ちゃんでした。

7歳のころ

私は何時ものように裏山でほんをよんでいた

ここにも慣れてきたしまあ快適だし、いいことずくめじゃん。それに華影ももらったしね

そんなことを考えていた。

そのとき、目の前を黒い影がよぎった。なんとなく追いかけていくと・・・

同年ぐらいの男の子がいますね

しかも追いかけれえてるし

助けますか

華影を手に取り向おうとした時

「あぶない!!」

男の子の声が聞こえ一瞬にして私に襲い掛かってきた黒いのを一刀両断した。

おお、なんか強い。けど、甘い！

私は男の子に襲い掛かってきていた黒いのを切った

つて、男の子大丈夫？

「大丈夫？」

「あ、ああありがとう」

「いえ、こちらこそありがとう」

極上スマイル^^

男の子さん怪我しまくりだけど？

直すか

「おまえ、名前は？」

「普通は先に名乗ると思うのだけど」

「そうか、俺はシークフリードだ。」

「わたしは、シェイデットです」

「俺お前気に入った。お前の護衛になる！！」

「??？」

「えっ、ええええええええええ」

「そんなに驚くかよ」

「えっと、じゃあよろしく」

「こちらこそな」

「怪我治すね」

「いいって」

「えんりよは無用！」

まずエリアシールドはって、んで、回復

以外に楽しーな

てか、顔まっかつかだし

かわいいよ

「よし、終わりー！」

「てか、お前は大丈夫なのかよ」

「うん、治療済みだし」

「怪我したのか！？」

「え、うん」

「ごめん」

「なんで」

「お前にけがさせちゃった。」

「これは私がつけたのだよ？」

「でも、ごめヒツくごめんなさーいうええええええええん」

「あらら」

ふわっと私は護衛さんを抱いきしめていた

「私は大丈夫だよ。だからなくなっていていいよ、それに私のために心配してくれてありがとう」

「・・・」

囁く様に言った。ってええええええ私なにやってんの

「あ、ごめん」

「イヤこのままで居たい」

「え、あうん」

そんなこともあり、まあげんざいにいたるわけです。

なつかしーな

何である時「このままで居たい」なんていうのかな？

今でも不思議です。

夢と現実（前書き）

最初のほう甘いけど

夢ですよw

夢と現実

いつまで寝てるのかな？

おこそつと

「シークフリード起きて」

「ん」

一瞬でおきた

「ふあああああよく寝た」

あんたね

「シェイデット」

「なに？」

「話がある」

「なに？」

「いいからいいから」

え、なんで？

とにかくついていって

なんか泉の前にいます。

「シェイデット」

「なに？」

「お前って俺のこと好きか？」

いきなり聞いてきたーーーー

「シークフリードは？」

「俺は好きだけど」

「えっと、どこが」

「全てがってだめかな？」

「だめじゃないけど・・・」

「からかってるの？」

「からかいでこんなこと言えるかよ！俺は本気だ！」

「私も好き」

「まじかやったーーーーー」

「！？」

「なあ」

「なに？」

「・・・っやっばいいや」

「？」

「なんでもない」

「なんだ」

「一つ言ってもいいか？」

「なに？」

「お前の唇は俺が奪う」

「なんちゅーことを」

「それだけだからな！」

「ふうん」

「なんだよ」

「コツチ向いて」

「ん？」

チュっ・・・・・・・・

「!!!!」

「私から奪った!」

「んな・・・・・・・・」

私はなんて大胆なことを!!

「こんにゃろ・・・・・・・・」

「w」

「顔真つ赤かだよシークフリードさん」

「く~~~~~」

「おい」

「ん?」

「コッチ向け」

「うん」

ちゅっ

「ん~~~~~」

何でいきなり

唐突すぎ

ってあたしもか

大好きな人とのキスってこんなにもいとおしいなんて

「ククッ」

「何で笑うのよおお」

「子犬みたいで可愛いなと思っただけです?」

「だけらって笑わないでよね。恥ずかしい」

「やっぱり可愛すぎ」

んも、でもうれしいな。

俺はなぜかこういう夢を見た

(これ夢ですよby作者)

現実

「おきないなこいつ」

「燃やしたるか？」

独り言です

「おはよ」

「遅いよサンシャイン」

「ごめん」

「まあいいけどね」

こいつよりかはましだし

てかなんでかおまっかつかなの？

（夢のせいですby作者）

「水かけよつか？」

「うん！思いつきかけてネサンシャインw」

（うあ、顔笑ってるのに眼が笑ってないしなんか黒いオーラが・・・
byサンシャイン」

「早くしてね？」

「は、はい」

バシャ

洪水並の水かかりましたね

まあいいけど

「ふあああ。よく寝た」

「「寝すぎじゃ」

「「めんなさい」

夢と現実（後書き）

あ、なんか意味フな感じですね

スイマセンね

もっとまともに書ければいいのに

主人公にとって弱い……

ほんとにもう

シークフリードったら寝すぎ!!

「そういえばサン」

「何？」

「何であの子猫襲ってきたの？」

そうだったすっかり忘れてたなんで私肝心なことの忘れてたんだろう

まあいえたから結果オーライで

「クリスのせい」

「あれクリスの手下だったの？」

「うん。しかも幹部並みの」

弱いなクリス絶対すぐ終わるな。

「で、どこにいるの？」

「あのお城」

「目立ちやすっ!！」

ドンだけ自意識過剰なんだか

「んじゃあ、尾のお城のつとろっか」

「はあ？」

「「「無謀だろ」「」」

「なんで？」

「「「なんでっていわれても・・・」「」」

あ、みんな連れて行くと戦闘の流れ弾が来るからあぶないか
んじゃ置いていこ。

（流れ弾が来るわけないboy作者）

「んじゃ行つてきまゝス」

「「「「いくなよ!！」」「」」

「いやいや大丈夫だから3分で戻ってくるから」

「「「「ちよっ」「」」」

「よーイドン」

あっけない戦い（前書き）

短いです

魔王さん弱いですね・・・

あっけない戦い

えと、着きました

雑魚たちは脅して縛って、（あとでお手伝いさんとして働かせて）

誰だったっけ？

まあ魔王？あー倒した。うん弱かった。技必要なかったよ

雑魚たちは城をきれいにして食事の用意をさせた

で、戻ってきましたね。

「大丈夫？」

「怪我なかったな？」

「何で連れて行かなかったんですか？」

と、口々に言われ、

「ちょっと、だって攻撃当たったら怪我するでしょう？」

「『それはお互い様』」

「で、まあ、倒してお城にすむことになりました」

「『え』」

「いくよ」

「「「「「ちよっ」
「「「「「」

「転送！」

シェイデットのもとへGO〜！（前書き）

次の話で完結W

「「「「「おおう」「」「」

「部屋まで案内しろ」

「かしこまりました」

『こちらえどっぞ、この最高の部屋でございます』

「悪くないわね」

『あの』

「なに？」

『ここは二名ま、まででなんですががが』

舌かみまくりだね

「あとこの部屋を3つ用意しなさい・・・1分以内で」

『はっ！かしこまりました』

「いくらなんでもひどいんじゃないの？」

「同感」

「できんのかな？」

「一応トップクラスだからいけんじゃないの？」

「え、なんでどうやってトップクラスを？」

「知らん。見てなかったからな」

「・・・」

なに？何で私入れてくれないの？

5人で秘密のことはなしちゃって

いれてくれないかな？

「なんか俺」

「どうしたシークフリード」

「アイツにかまいたい」

「くくくくく（笑）」

「なつ、なんなんだよ」

「んじゃ愛しの彼女んと言ってきなさい」

「な、何でばれてるんだ？」

「くくく態度で分かる」

「・・・」

「覚えてろ!!」

「「「なにを?」」」

「もういい!!」

そついでシークフリードは走り去ってゆきました。

「「「備考開始」」」

告白

シェイデット・・・

今この思いを伝える

はは妙に緊張するな

まあいい

ついたな

「シェイデットお前に言いたいことがある」

「なに？」

「すきだ」

ふ、ふられるな

「わ、わたしもすき」

ええええええええええええええええええええええええ

「!」

告白（後書き）

おわりです

今まであります

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4645m/>

日常から始まった私の冒険日記

2010年10月9日13時14分発行